



小さな氷の大きなお話

西條 瑠奈さん
(戸倉小学校4年 ⑦荒町)

読書感想文
コンクール
小学校高学年の部
最優秀賞

夏休みに入る前、先生にすすめられたのがきっかけでこの「こおり」という本を読むことになりました。初めは自分で選んだ本ではないので、この本おもしろくないし、内容はむずかしいなあと思っていました。でも読んでいて、(このページおもしろいなあ)というページがありました。そのページには大きな色のついた氷がのっています。その氷の絵を見たら食べたくなりました。そしてもう一度最初から読むことにしました。はじめは冷凍庫の水について書いてありました。実さいに自分の家の氷を見てみると白いところや小さなあわがあり、これが空気だということが分かりました。今までは、これが空気なんだと思って食べたことはありませんでした。水には水の分子と空気の分子の分子、それからまたべつ分子へとつぎつぎと手をつなく相手をかえています。本では水の中は休み時間の校庭のようで、水の分子はたくさんの子ども、空気の分子はその子どもたちが持っている

る風船だと、分かりやすく例えてあります。水から氷になる様子も0度になると水の分子は持っている風船を手ばなし、他の子どもの足をにぎって次々につながりきれいな形のジャングルジムを作ることでもちがうところがあれば仲間には入れてもらえないので氷になるって大変なんだな、て思いました。またゆっくり長い時間をかけてできた氷のジャングルジムは空気のあわの少ないきれいな氷になるそうです。テレビで見たことがあります。二日も三日もかけてゆっくりと水をこおらせた氷はともとうめいで、きれいで、その氷で作ったかき氷はフワフワでおいしそうでした。この本には透明な氷の作り方が書いてあります。ぜひ今度透明な氷作りにもチャレンジしようと思います。あるページに色々な色の氷の絵がかいてあります。私の一番のお気に入りの絵なのですが、そこには、「色のついたこんな氷、あなたは見たことありますか?」と書いてあ

ります。ジュースをこおらせて作ったことがあるなあと思っただけですが、あれは氷に色がついたのではなくジュースの中の氷がこおってきた水で、スプーンではずしてみても無色透明で味もそんなにあまりはないそうです。私は今までオレンジジュースをこおらせてと色がつくんだと思っていました。なのでこの本を見てびっくりしました。そして水だけで固まろうとする氷のこんな性質がかりかいてきました。

から遠いところの寒さはゆるやかになっているそうです。だから、冷たい海には住めない魚もあたたかい浅い海で生きていくことができるのです。わたしたちが地球の広いはんに住むことができるのも海流によって地球全体がほどよい気候にたもたれているからなんだとわかりました。はじめは小さなこおりのお話かと思いましたが、このこおりが地球全体の生活に大きく関わっていることが一番の発見でした。今、地球温だん化で南極の水が年々とけてきていることを思い出し、私たちが大人になった時に地球がどうなっているのか心配です。

書名：こおり
著者名：前野 紀一
出版社：福音館書店



「こちら救命センター」 を読んで

阿部 京香さん
(志津川中学校3年 ⑧水口沢)

読書感想文
コンクール
中学校の部
最優秀賞

図書室でなに気なく目にとまり、手にとった一冊の本。題名は『こちら救命センター』。なぜ目にとまったのか。それはきつと、私が目指している薬剤師と同じ医療についての本だったから。この本の作者でもある浜辺祐一医師の専門は救急、外傷外科である。東京大学医学部を卒業しているのにもかかわらず、冒頭では自分の事を「孤独なヤブ外科医」と呼んでいる。この話は、もともと看護婦向けの月刊誌に連載されたもの。しかし、難しい用語や専門知識のようなものは多く出てこない。ストリートに日々救命センターで起こる出来事や浜辺医師、その周りの看護婦たちの気持ちを一つづつ描いている。この本を読んだ素直な感想は、現実って甘くないんだな、ということだ。真つすぐな浜辺医師の言葉は一つ一つが私の心の奥に突き刺さってきた。きれいな言葉だけではないが、心からの言葉で表現された感情は、私に新しい風を吹き込んでくれた。その中でも特に響いた言葉。ある夜に運ばれてきたのは、オカマの患者であった。看護婦が「疲れた、扱いに困る。」と口にしていて。その時に浜辺医師が言った「様々な人生を許せる余裕がなければならぬ。」という一言であった。

この言葉で私の中に浮かんだ一つの疑問。夢を持つのも叶えるために努力するのも良い事だけれど、その前に誰かを助けられる余裕が私にはあるのだろうか。ふと問いかけた答えに困り、思わず視線が落ちる。受験という壁を越えるために必死な私には何日かかっても答えなど見つからなかった。そんな時、愛用の音楽プレーヤーからAIさんの『Stone』が流れた。「時が流れてく痛みと共に流れてく。」という歌詞。まだ、十五年しか生きていない私が、倍以上生きてきた浜辺医師と同じなわけがない。スタートラインについたばかりでゴールテープの切り方を考えていた自分に気がついた時だった。本からもらったもう一つの課題。それは、経験が教えてくれるものは何か、ということだ。子どもが溺水し運ばれてきたが、亡くなってしまう。霊安室を出て、浜辺医師と看護婦が冗談を言いながら歩いているのを見て、一部始終を見ていた看護学校の学生が、あり得ないという表情をしていた。浜辺医師と看護婦の会話での浜辺医師の言葉に、私は納得させられた。「私たちは、ただごまかすのがうまくなっただらうね。でも、もう思わなきゃやっつけられない

いことが何とも寂しいね……。治療して生きる人もいれば亡くなる人もいるだろう。その現実を前に毎日泣いていたのは、仕事にならない。私には生と死に慣れるということとは全くわからない。しかし、私生活の中に慣れというものはいくらかもある。例えば、友人や家族の存在。毎日のように一緒にいる、ご飯を食べる、話をする。当たり前のことだけど、慣れているせいで感謝を伝えることもない。そして、失って初めて気づく大切さ。慣れすぎて恐ろしい。医師でも看護婦でもない私には、深い意味などわからない。まだまだ、十五歳の私には知らない世界が無限に広がっている。これから私が見ていく世界は全て輝いて新鮮だと感じるはず。

医療に携わる者は、誰でも通る道なのだろう。浜辺医師と看護婦も若い時は、先ほどの学生と同じだったのだ。けれど、多くの患者と出会い、たくさんの経験を積んだことで、自分の中で気持ちを処理できているのだから、遺体を清める時の看護婦の悲しみ、死の宣告をする医師のつらさもある。しかし、それが仕事。慣れるまでは、どれほどの時間と辛さ乗り越えたか、はかり知れない。名医や婦長と呼ばれる人は、このような道を通ってきたのだ。また、一人前と呼ばれるようになる為には、誰もが通るのだと思う。多くの経験をすれば、違う視点から物事を考えられるようになる、ということだ。私は夢を実現して、支えてくれた人々や様々な経験をさせてくれた人たちが大変な状況にある時は、そっと手をさしのべられる人になる。多くの笑顔を作りだし、多くの命を救う。そんな私になりたい。辛いことも、悲しいことも全て私の経験となっていくのだ。だからこそ、越えなければならぬ。そして、私が誰かの将来のために成長できる経験の一つを与える時がやってくる。その時には、大きな経験を与え、その人を夢という目的地へ少しでも近づけてあげられる私であってほしい。この本を通して決意したことがある。それは、全てを越えていくということだ。人より辛さや悲しみを知り、陰から強く優しく支えてあげられるようになる。きつと叶うはず、いや、叶えてみせるのだ。

書名：こちら救命センター
著者名：浜辺 祐一
出版社：集英社文庫